法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

岩生成一先生追悼

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
41
(開始ページ / Start Page)
58
(終了ページ / End Page)
71
(発行年 / Year)
1989-03-24

Hosei University Repository

岩生成一先生　追悼

本会顧問、元法政大学文学部教授・東京大学名誉教授、日本学士院会員岩生成一先生は、昭和六十三年三月二十一日午前八時二十七分、腎不全のため神奈川県横須賀市の衣笠病院で逝去されました。享年八十七歳。告別式は、翌二十二日午後一時から自宅となっている神奈川県三浦市三崎町諸磯一五〇〇の老人養護ホーム「油壺エデンの園」で行われました。墓地は富士霊園一―三―一一七三（静岡県駿東郡小山町大御神八八八―二）です。心から哀悼の意を表します。

さきに『法政史学』第二十六号（昭和四十九年三月発行）には「岩生成一先生略年譜・論著目録」を載せていますが、本号では、これを増補修訂し、追想八篇と併せ収めました。

なお『法政』十五巻四号（法政大学、一九八八・五）に「岩生成一先生を悼む」（大森実）があるほか、元講師を含め本学関係者の寄稿としては、『東方学』第七十六輯（東方学会、一九八八・七）が、「岩生成一博士を偲んで」（箭内健次）、「岩生先生と海外史料の蒐集」（沼田次郎）、「岩生先生と私」（生田滋）および「岩生先生と法政大学」（安岡昭男）の四篇で追悼録とされています。

岩生成一先生略年譜・著編書目録

【略年譜】

明治三三（一九〇〇）年　六月　誕生（二日、東京市牛込区市ヶ谷）。
三五（一九〇二）年　母病没のため、この頃本籍地の福岡県小倉市馬借町に移る。
大正　八（一九一九）年　三月　福岡県立中学明善校卒業。
大正一一（一九二二）年　三月　第五高等学校文科甲類卒業。
大正一四（一九二五）年　三月　東京帝国大学文学部国史学科卒業。
〃　〃　四月　史料編纂官補（東京帝国大学史料編纂所）。
昭和　三（一九二七）年　七月　海外出張（史料収集・遺跡調査、中国・英領香港・仏領印度支邦・暹羅・英領馬来・蘭領東印度、～一〇月）。
昭和　四（一九二九）年一一月　台北帝国大学助教授（文政学部、南洋史講座担当）。

Hosei University Repository

昭和　四(一九二九)年一一月　依田光子と結婚（媒妁人黒板勝美教授）。
昭和　五(一九三〇)年　二月　台湾総督府在外研究員（蘭領東印度・和蘭・英吉利などに留学、三月～七年六月）。
昭和一一(一九三六)年　三月　台北帝国大学教授（文政学部）。
昭和一四(一九三九)年　八月　蘭領東印度出張（史料調査収集、～一二月）。
昭和一六(一九四一)年　五月　帝国学士院賞受賞（著書『南洋日本町の研究』による）。
昭和一八(一九四三)年　三月　台北帝国大学南方人文研究所所員（第二部）。
昭和二〇(一九四五)年一一月　中華民国国立台湾大学に留用。
昭和二一(一九四六)年　四月　中華民国国立台湾大学文学院教授に聘傭。
〃　一二月　解任。台湾より帰国。
昭和二二(一九四七)年　一月　廃官につき台北帝国大学教授退職。
昭和二三(一九四八)年　四月　法政大学文学部兼任講師（～三八年三月）
〃　四月　日本大学講師（～三六年三月）
〃　五月　文部教官、東京大学教授（文学部国史学科、第三講座担当）。
昭和二四(一九四九)年　二月　東京大学史料編纂所勤務（文部事務官兼任）。昭和二十九年四月併任。
昭和二五(一九五〇)年　三月　財団法人東洋文庫研究員
昭和二六(一九五一)年　八月　文学博士（東京大学）。「南洋日本町の研究」による。
昭和二七(一九五二)年　八月　日蘭交渉史研究会を結成主宰（没時まで）。
昭和二九(一九五四)年　四月　上智大学大学院非常勤講師（～四七年三月）。
〃　六月　万国学士院連合総会（スイス国ベルン）に出席。（日本学士院代表委員）英・蘭両国へ出張（～九月）。
昭和三〇(一九五五)年　六月　万国学士院連合総会（ベルギー国ブリュッセル）出席（日本学士院代表委員）、蘭・仏両国出張（～八月）。
昭和三三(一九五八)年　日仏歴史学会会長、日蘭協会顧問。
昭和三五(一九六〇)年　八月　欧州各国へ出張（日本学士院委嘱の日本関係未刊文書調査、～一〇月）。
〃　一〇月　中華民国（台湾）へ出張（東方学研究連合委員会連合会議の日本側委員長）。
昭和三六(一九六一)年　三月　東京大学教授停年退官。
〃　四月　日本大学文理学部教授
〃　七月　財団法人史学会顧問（没時まで）
〃　七月　財団法人東方学会理事（没時まで）
昭和三七(一九六二)年一一月　ユネスコ東アジア文化研究センター専

Hosei University Repository

門委員会委員長。
昭和三八(一九六三)年　四月　法政大学文学部教授（史学科主任、大学院日本史学専攻主任）。
〃　法政大学史学会会長（～四六年三月）、法政蘭学研究会会長（没時まで）。
昭和三九(一九六四)年　一月　講書始に「近世日本の海外貿易」進講。
〃　八月　台湾・香港出張（ユネスコ依頼による旧台湾総督府関係史料調査と東南アジア国際歴史学会＝香港出席、～九月）。
昭和四〇(一九六五)年一一月　日本学士院第一部（人文科学）会員選任（没時まで）。
昭和四三(一九六八)年　一月　朝日文化賞（四三年度）受賞（「外国史料の導入によって日本史研究に新分野を開いた功績」による）。
〃　四月　財団法人国際教育情報センター理事（没時まで）。
昭和四五(一九七〇)年一一月　勲二等（瑞宝章）に叙勲。
昭和四六(一九七一)年　三月　法政大学文学部教授定年延長退職、
〃　四月　法政大学文学部兼任講師（四九年三月まで、大学院、五四年三月まで）。
昭和四七(一九七二)年　四月　南島史学会初代会長（～五〇年九月）
〃　一一月　オランダ女王より日蘭交渉史の研究・日蘭親善の功により勲章 Commandeur in de Ordre van Oranje-Nassau 授与。
昭和四八(一九七三)年一一月　英・蘭両国出張（日英両国学士院の近代日本における日英文化交流史の共同研究の協議など、～一二月）。
昭和五二(一九七七)年　六月　英国学士院 The British Academy 通信会員（Corresponding Fellow）選任。
昭和六二(一九八七)年　五月　東京大学名誉教授。
〃　一一月　転居（渋谷区宇田川町住宅より神奈川県三浦市三崎町諸磯の油壺エデンの園へ）。
昭和六三(一九八八)年　三月　逝去（二一日、横須賀市衣笠病院にて、八七歳）。
贈正四位。

【著　書】

近世日葡通交小史　一九二七・二　葡萄牙副領事館一九
近世初期の対外関係　一九三四・一〇　岩波書店〔岩波講座日本歴史〕
南洋日本町の研究　一九四〇・四　南亜細亜文化研究所
海外交渉史　一九五三・三　法政大学通信教育部
近世日本人南洋発展史（国史特別講義）一九五三・七　日本大学通信教育部
朱印船貿易史の研究　一九五八・四　弘文堂
十七世紀台湾英国貿易史料　一九五九・一一　台湾銀行調査係

Hosei University Repository

（台北）
朱印船と日本町　一九六二・一二　至文堂〔日本歴史新書〕
（一九六六・増補版）
Van Vliet's Historiael Verhael in Siam, 1640. 2vols.　一九五六・一九五八　東洋文庫
List of the Foreign Office Records Preserved in the Public Record Office in London relating to China and Japan.　一九五九　東方学会
鎖国（日本の歴史14）　一九六六・三　中央公論社
南洋日本町の研究（増訂版）　一九六六・五　岩波書店
明治以前洋馬の輸入と増殖　一九八〇・一一　日蘭学会
新版朱印船貿易史の研究　一九八五・一二　吉川弘文館
続南洋日本町の研究　一九八七・一一　岩波書店
——南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動——

【訳注校訂書】
慶元イギリス書翰　一九二八・八　駿南社〔異国叢書〕
（一九六六・　雄松堂書店）
アビラ・ヒロン日本王国記　一九六五・九　岩波書店〔大航海時代叢書〕
リンスホーテン東方案内記　一九六八・九　岩波書店〔大航海時代叢書〕
セーリス日本港航記
ヴィルマン日本滞在記　一九七〇・二　雄松堂書店〔新異国叢書〕（村川堅固・尾崎義訳解説校訂）

【編　書】
外国人の見た日本1（南蛮渡来以後）　一九六二・一〇　筑摩書房
近世の洋学と海外交渉　一九七九・八　巌南堂書店
（法政大学史学科開設三十周年記念論文集）
出島図——その景観と変遷——　一九八七・三　長崎市出島史跡整備審議会編

【監修書】叢書類を除く
日本人物文献目録　一九七四・六　平凡社
（法政大学史学研究室編）
京都御役所向大概覚書　上下　一九七三・八　清文堂出版
和蘭風説書集成　上下　一九七七・七九　吉川弘文館
（日蘭学会・法政蘭学研究会編）
教師のための体系日本史　一九五四・四　弘文堂
海外交渉史の視点　1 2 3　一九七五・七六　日本書籍
Biographical Dictionary of Japanese History　一九七八　国際教育情報センター

岩生成一先生追悼

Hosei University Repository

【論文抄】　法政大学関係刊行物のみ

平戸イギリス商館文書とその性格
（法政大学文学部紀要第九号　一九六三・一二）

鄭成功の一書翰について
（法政史学第一七号　一九六五・三）

江戸幕府の代官平野藤次郎
――近世初期一貿易家の系譜――
（法政大学文学部紀要第一三号　一九六八・三）

長崎出身のジャカルタ移住日系人　村上武左衛門の遺言状
（法政史学第二二号　一九七〇・三）

〈付記〉

『日蘭学会会誌』一三巻一号（一九八八・一〇）の金井圓編「岩生成一先生略年譜及び著書論文目録」を参照（安岡）。

岩生先生をしのぶ

山脇悌二郎

一九四八年（昭二三）五月のある晴れた日、岩生先生は東大文学部二四番教室にはじめて見えられ「十七世紀東インド地方における日本移民」と題する講義をなさった。翌水曜日は「近世日支交通貿易史」、金曜日は「国史演習」であった。「十七世紀――」ではオランダ語つづりの注が沢山出てきて閉口、「近世――」は、徳川家康の日明貿易復活運動が講義の核になっていて、これまた中国史料が続々と現われて参ってしまった。ゼミは西川如見の「長崎夜話草」をテキストにされた。次年度、わたくしは受講届は出したが、殆んど出席しなかった。しかしこの年はじめて先生のお宅をたずねた。最初の会話は自己紹介だった。高知の生れですと申し上げると先生は「わたしの家内ももとは高知です。家内は坂本龍馬の海援隊の隊員であった池内蔵太の孫にあたる」といわれた。池内蔵太は慶応二年、帆船ワイルウエル号が肥前塩屋崎沖で遭難した時、殉難した人である。先生は少年時代を九州小倉ですごしたといわれたので調子を合わせ、「わたくしの先祖も小倉にいました。関が原戦争当時の小倉の城主毛利隆永の家来でした」とやってしまった。すると先生は「先祖が書き残したものがあるか」といわれた。それから先生は奥から書きものを取り出してきて見せてくださった。それは坂本龍馬が池内蔵太に宛てた手紙であった。

Hosei University Repository

わたくしはやがて、やる気を起こし五〇年三月卒業はしたが、隔週日曜日ごとに質問を用意して先生のお宅をたずねた。「あまり朝早く来るなよ」といわれたが、いつも温顔で、雑談抜きでいきなり質疑応答に入り、時にはたっぷり二時間はねばった。博覧強記、汲めども尽きずといった感で、すばらしく魅力的だった。「研究はあせってはいけない。ひとの研究業績をとり上げてものをいうのは比較的容易だが、時間はかかっても自分の研究分野を開拓するように」と再三いわれた。「君は日中貿易をやれ。オランダに手を出すな。あちこちやるとものにならない」ともいわれた。わたくしは全くオランダに手は出さず、五五年三月まで、こうして江戸時代の日中貿易ばかりやった。

一九六三年(昭三八)、先生は「物価史研究会」をつくられた。資金源はハーバード大学の燕京研究所であったようである。わたくしは会計・庶務を任された。なおまたこの後「日蘭交渉史研究会」をつくり、生涯、指導をつづけられた。わが会員は八名で毎月一回、先生のお宅で研究会を開き、長崎オランダ商館の取引帳簿を使って、蘭船輸入品の仕入原価、長崎売値、収益などを統計しようとした。しかしやがて、こういった統計の作成は無理であることがわかり、会は当初の研究目的を失った。わたくしは、さきの先生のお言葉に従ってオランダはやらず、蘭語のア・ベ・セさえ知らなかったから、この間、何もできなかった。六七年、会場は駿河台下に移った。このころから会員の集まりがわるくなり、時には流会した。人を待つ先生のご様子はなんだかわびしかった。わたくしはオランダ語の独学を始めた。七〇年(昭四五)、わたくしは任された会の仕事を強いて辞退させていただいた。理由は申し上げなかったが、妻が手遅れのガンだった。先生はただひと言「君は協力しないぞ」と語気強く叱責され、その後は、わたくしがお宅を訪ねるのを許されなかった。つまり破門された。会場はさらに本郷に移り、次いで湯島に移り、また本郷に戻るなどして継続したが、先生は殆ど出席されなくなった。

七四年(昭四九)六月、わたくしは妻を亡くした。ところが、十二月、丁重なお悔やみのことばに添えて、落ち込みから立ち直るようにとはげまし元気づけるお手紙が先生から届いた。やがて再婚すると、お心のこもった記念品を贈って祝福してくださった。許されたのである。その後、わたくしは先生の跡をおそって、法政大学通信教育部の指導講師になり、いまでもやらせていただいているが、ご推挽があったことであろう。

八五年(昭六〇)五月、わたくしは先生のお宅で、来日した中国の歴史学者夏応元氏に面接した。氏の依頼で先生が仲介の労を取られたものである。氏が辞去してからゆっくり雑談した。それが親しくお話した最後になった。そのとき、最近、頼まれて唐・蘭船の伊万里焼輸出を調査していますと申し上げると「フォルカーは持っているか」といわれた。「フォルカーは持っています。ヘルダーの「オランダ東インド会社の磁器貿易資料」という論文をお持ちでしたら」というと、先生は快諾され、なお染付や色絵の実物も見ておくようにと都内各所の美術館を教えられた。数日後、そのヘルダー論文に添えて、かつてオランダで手写された日本磁器貿易史料のコピーも送ってくださった。その後わたくし

Hosei University Repository

は体調をくずして病院通いをつづけたので御無礼を重ねたが、伊万里焼貿易の研究は八八年（昭六三）一月、ようやく活字になったから、とりあえず郵送申し上げた。然し先生はすでに病床に伏していられたことを後になって知った。

師よ、お世話になるばかりでした。今日もオランダ語をやっています。史料オランダ語であります。（一九八八・一二・一九）

（元法政大学文学部、大学院講師）

岩生先生とオランダ文書

永積洋子

一九六七年の秋、ほとんど五年に近い外国生活を終えて、久し振りに岩生先生をお訪ねすると、別人のように明るくなられたのに驚いた。六三年に法政大学史学科に主任教授として着任されてから三年、夏休みには追分の山荘に学生を泊めてなどという、私の学生時代には考えられない話をうかがいながら、先生の戦後は終わったという感を深くした。この二年後には学士院会員に選任され、六八年には朝日賞を受賞されている。先生の長年の御精進の成果が実をむすんで、数々の栄誉に輝いたのが法政大学御在任の間だったと思われる。

一九五四年、万国学士院連合の総会のため先生は戦後はじめてヨーロッパに渡航され、数十人が集まって送別会が開かれた。その時の実にうれしそうなお顔は忘れられない。ベルンで開かれたこの会議には、スイス駐在の萩原大使も出席され、すでに一九三六年からはじまっていた海外にある日本関係文書収集の再開が討議された。これらの文書について最もくわしい先生と、語学に堪能なベテラン外交官という組み合わせは、最上の日本代表だったにちがいない。ところがその翌年、先生が再び代表としてブラッセルで開かれる総会に出席されることに決まると、東大文学部教授会では、同じ人が二年つづけて出席するのはおかしいという強硬な反対があったらしい。大学院の演習の時「いろいろ言われるので、今年はヨーロッパに行くのがいやになっちゃったよ。」と言われ、なんとも返事に困ってしまった。西洋史、ドイツ文学などの主任教授でさえ、まだ一度も外国に行ったことがないという時代の話である。

この二年にわたる交渉の結果、五七年から日本関係文書の収集が再開された。しかも戦前の文書館の写字生による手書きとはちがって、マイクロフィルムによる複写は遙かに能率よく、正確に行われるようになった。この事業のおかげで、今では一七、一八世紀にかんしては、ハーグの文書館より、東大の史料編纂所の方が、はるかに研究に便利となった。ハーグでは文書の傷みのはげしい時代のものはマイクロフィッシュでしか閲覧を許さず、文書のゼロックスも許さないことになったからである。そしてこれ程膨大な文書を、短期間に発注できたのは、戦前に先生がオランダ滞在中に作られた目録があったためである。

先生の御生涯は実に幸運に恵まれておられた。黒板勝美教授のアジア視察旅行に同行して、バタヴィア文書館の文書を御覧になったのが、この分野を専門とする契機となったとは度々うかがっ

Hosei University Repository

たことである。又台北帝大に赴任された直後、二年あまり海外に留学され、その後二年間はほとんど講義の義務はなく、専ら研究に従事されたという、現在では考えられないような恵まれた研究期間を過ごされた。更に戦後は日本の国際化がようやく唱えはじめられた高度成長期に、海外史料の収集という事業をなし遂げられたのである。考えて見ると、今や日本は経済大国として知られているのに、恥ずかしい位の文教予算しかないから、戦後のあの時期を逃しては、万国学士院連合の援助を得た文書の収集はできなかったろう。

今はすべてにゆとりがなく、学者の業績も論文の質よりはむしろ量ではかられるという、おかしな時代となってしまった。したがってオランダ文書を使って行うような、時間のかかる研究には、なかなか人が育たないという情けない状況にある。日頃岩生先生の幸運の余得にあずかっている者として、この世界一のコレクションを使いこなす人を一人でも多く育てることこそ、先生の学恩にこたえる道と信じている。

（法政大学文学部講師）

岩生先生の思い出

——大学院での教え子として

長尾正憲

私は昭和四十四年四月法政の大学院修士課程に入学し、五十年三月博士課程の単位取得をした。修士論文「福沢屋諭吉考」は岩生先生を指導教授として四十六年度に提出したものであるし、大学院を出てからも私は法政大学の講師を八年勤めるほかに、先生が理事をされていた（財）国際教育情報センターと（財）日蘭学会の事務局で国際交流関係の研究職を通算十年、六十二年六月まで勤めた。修論を発展させた「福沢屋諭吉の研究」により文学博士の学位を取得したのが、先生の逝去されたと同じ六十三年三月であるのも思いあわせ、先生の師恩の深いことを痛感するしだいである。

定年後の学究生活を志して、当時五十五歳の私は、某社の編集部長の現職として入学したのであるが、十四年年長の先生は私には温和で親切な慈父のように思われた。横文字が黒板いっぱいの板書はノートにとりにくかったが、ベトナム・ジャカルタ・ハーグなど海を越えて埋もれた史料採訪にゆかれた先生の体験談に洋学・海外交渉史への研究心をかきたてられ、私たちは希望して難解な欧文古文書の読解やオランダ語の習得もしたのである。学園紛争中お宅でしてもらった学習も忘れられないが、一番なつかしい思い出は、四十九年十月二十七日～三十日、京都・奈良・天理・大阪に三泊四日の研修旅行をしたことである。先生に同行したのは法政で大森・武田・長尾・岡田・根岸・福川、日大で佐藤氏の七名、いずれも海外交渉史研究会員である。この研究会は四十八年二月、先生の受講者のOBと現役とが結成したもので、当面「ウィリヤム・アダムスの航海記」と「異国日記」の校訂を中心課題として毎月例会を開いていた。

岩生先生は私ども院生の研究意欲を高めるために、共同で校訂

Hosei University Repository

や調査研究をおこない、それを「本」の形にまとめることを勧められた。その結果、私どものM・Cクラスメート六名（岡田・新城・仙石・長尾・村岡・渡辺、五十音順）は協力して、先生の監修のもとに先生が近世史演習に数年間継続使用されたテキストの『京都御役所向大概覚書』上・下（清文堂、一九七三・八・二〇初版、一九八八・四・二〇再版刊）を校訂し公刊したのである。

また先生は史学における伝記研究の重要性を力説しておられたが、その面で当時の助手（現東海大学教授）森睦彦氏が中心となって、私ども院生も協力し、大冊の『日本人物文献目録』（平凡社、一九七四・六刊）の労作を法政大学史学研究室の名でまとめられた。

京都旅行もこうした背景で実現したらしい。日誌をみると、第一日は九時の「ひかり」で発ち、京都国立博物館に直行して国宝「異国日記」を撮影し、栗田口青蓮院前の公務員宿舎に一泊。翌朝は七時起床、南禅寺金地院、順正書院、妙顕寺・十念寺・清水寺を巡見し、先生から崇伝・茶屋四郎次郎、御朱印船絵馬などの話を聞いたあと、撮影作業を続行した。中食時に急勾配の石階をよじ登り豊国廟で記念撮影をしたが、先生の健脚ぶりに敬服した。奈良に二泊し、第三日は天理大学の貴重図書閲覧と石上神社、第四日は東大寺と博物館を見て、午後大阪の南蛮美術館見学をおえ帰京した。「異国日記」「御朱印帳」の原本撮影を完了するとともに、該博な先生の現地講義によって史実を生きいきと実感できたことは、海外交渉史研究の上で大きな収穫であった。

しかし、この旅には悲しい後日談がある。六十三年一月、大森実教授の呼びかけで、旅行仲間のうち法政の五名が集まって、先生が渋谷から三浦半島油壺の新居に移転されたお祝いに、三崎港のレストランにご夫妻をご招待し旧交を温めた。先生の健啖ぶりを一同喜んだのであるが、その後健康を害され、三月二十一日逝去された。「異国日記」校訂はついに先生のご存命中に本にならなかったことは、かえすがえす残念である。

また、私の論文が本になることを喜ばれて序文をおひきうけいただいたのに先だってゆかれた。私はもはや大学院時代の先生の年齢をこえてしまったが、D・C入学のとき「論文はわかりやすくおもしろく書くように」とご注意をうけたことをいつも思い出し反省しているしだいである。（昭和六十三年十二月二十三日）

（横山大観記念館学芸部長）

先生から学んだことなど

武田　万里子

岩生先生の御著書で一番読んだのは『朱印船貿易史の研究』だった。ほとんど文章を暗記した個所もある。これは勉強の仕方を学ぶよりさきに、まず文体が似てくるということで、自分で文章を書いてみると、どうも先生の文体に近いのではないかと感じることがあった。簡潔・平易・過不足のない論旨の表現には遠くおよばなかったが。結論を一、二、三と番号で整理する仕方も同様で、お弟子の中にはこういうやり方の人もほかにおられる。二十年も前、法政にご厄介になっていたころ、先生から帰りの電車の

Hosei University Repository

中で、史料そのものが語りかけてくるものをよく聞き取るのが肝要だ、と言われたことがあった。このことの大事さに気が付いたのはそれよりあとのことで、当時の私には、この言葉はやや退嬰的にしか受け取れなかった。『朱印船貿易史の研究』はじめ御著書は、すべてにわたってこの姿勢が貫かれていて、きちんと根拠を固めたいかにも手固いお仕事ばかりだった。しかし雑談の折にはかなり思い切った問題提起というか、一段高い視点からの大胆な見通しがあって、馨咳に接することができたのは有難いことだったと感じている。その先生から拝借した書籍でも、ずい分と勉強させていただいた。ご存知のように、先生の御蔵書は線引きのほか、空白が要旨やコメントの記入でうずまり、必要ならば再作成した索引、目次、他書の引用文も添付され、一、二割も厚みを増していることもある。この追加部分が大変参考になった。本自体をノート化・カード化し、これという内容については別にノートを作っておられたが、これが私共の史籍解題の授業に用いられた。このノートももとの厚さの二、三倍にもふくれ上がっていた。ある時弟子たちがその清書、出版のことをはかったら、君たちが見ても分からないから、とあっさり断わられてしまった。この作業は八十歳を過ぎても続けられ、ご自身はよい協力者を得て出版したいと望まれていたが、果せなくなって残念だ。ご蔵書を拝借すると、台湾から帰られた中年以降のひたすらなご勉強ぶりがしのばれる。それにしても、お年を召してから購入された本には、次第に書き込みが少なくなってゆくのがさびしく感じられた。御蔵書のうち、洋書についてはいずれ所を得て、研究者に公開されると聞いているので、再会できるのを楽しみにしている。

（法政大学大学院博士課程修了）

岩生成一先生を偲んで

石山禎一

私が岩生先生とお逢いしたのは、先生が不帰の人になられる二か月前のことであった。早春の暖かな晴れた一月七日（日）の午後、私は東海大学教授向井晃氏と共に、先生の新しいお住居（三浦市三崎町「エデンの園」）を訪れた。公私共に多忙になった私にとって、先生とお逢いするのは、二年ぶりのことである。三年前に、渋谷のご自宅にお伺いした時に比べ、お年のせいもあってか、やや弱々しさを感じさせた。それが意外にも早く、二か月後にご逝去されるとは、夢にも思わなかったのである。この数年、先生とお逢いする時には、必ずといってよい程、私は小さなテープレコーダーを持参し、先生の研究上の話題を収めた。それは先生の学問上の情熱と気迫を少しでものがしたくないという気持からであった。先生は学問をこよなく愛し、また人に接する態度は、物腰やわらかく、しかも謙虚であった。こうした先生のお人柄に魅力をひかれ、渋谷のご自宅に何回かお伺いしたり、また軽井沢にある先生の別荘にもお訪ねしたりした。渋谷では紅茶とケーキをいただき、軽井沢では奥様の手料理、時にはトウモロコシをご馳走になりながら、研究上の話題に花を咲かせ、楽しい一刻を過ごさせていただいた。先生との出合いは、私の大学院入学時

Hosei University Repository

からであった。痩身のお身体の中にひそむ、エネルギッシュな幅広い社会活動、深い学識に只々敬意をいだきながら、日蘭交渉史研究の実にすばらしいご講義を拝聴した。卒業後、私がシーボルト研究に興味をいだく様になったのも、先生の影響からであった。先生は、私の拙い研究にもかかわらず、いつも並々ならぬ細やかなご指導とご教示をして下さった。講談社が「シーボルト日本」の原書を復刻した折、先生から〝解説の一部を執筆してみたらどうか〟という、大変ありがたいお話をいただいた。そこで拙文ながら、『シーボルト「日本」の研究と解説』で、〝日本における茶樹の栽培と茶の製法〟を執筆した。その後、先生のご尽力で、雄松堂書店から「シーボルト日本」の全訳をする運びとなり、その一部を私が担当することになった。これも先生のご推薦によるものであった。〝茶の栽培と製法〟〝日本の貿易と経済〟さらには〝日本の鍼術知見補遺(烙針法)〟〝茶の効用について〟等々、拙い訳ながらも相次ぐ原文の翻訳に努めた。その都度、先生の暖かなご教示を仰ぎながら、私なりに幅広い勉強をさせていただいた。

先生と最後にお逢いした時のお話は、研究上の話題というより、むしろ新しく移られたお住居でのご様子や先生ご自身の近況が多かった。しかし、その中で先生は、シーボルト晩年の写真が掲載されている日本の著書があることを教えて下さった。そこで私は、早速にもこれを購入し、その写真がどのようにして日本人の手に渡ったかを調べ、その結果を先生にご報告する旨、お約束した。しかし、今となっては、それが果たせず、とても残念でならない。現在、私の手元には、先生のご労作『新版朱印船貿易史の研究』扉前の見返しの頁に著名して下さった〝石山学兄、恵存　昭和六十一年一月十九日　岩生〟のご本と、軽井沢での元気なお姿の写真、それに先生の学問に対する情熱の声を収録したテープ等がある。私はこれらをいつまでも大切にすると共に、先生のご恩に報いるためにも、これから尚一層、勉強に励んでいきたいと思っている。慎んで、先生のご冥福をお祈りする次第である。

(神奈川県立相模大野高校教頭)

岩生先生の思い出

山本美子

岩生先生が亡くなられた。とても信じられない。法政と歴史とそして私の青春を想う時、すべて岩生先生につながっている。『南海貿易史』の教室で、得意の居眠りをはじめた私。席は教壇の真前である。「……コルネリヤの乗る馬車の紋章はカボチャで……」と先生の声が段々遠くになる。ノートの字もミミズ。その途端、バシッと耳元でものすごい音。先生が講義用のノートを私の机に打ちつけられたのである。シンと緊張する教室の空気。

講義終了後、あやまりに行った私に、「そんなに眠い授業かね」と一寸おどけた口調で言われた先生。とんでもない。私が歴史を志した動機はこの授業にこそあるんですと意気込んで申し上げる。

幼い頃、ラジオドラマで聞いた『新諸国物語』。その始まりの

Hosei University Repository

歌「……ルソン・アンナン・カンボジヤ、はるかオランダ・イスパニヤ、おもかじいっぱい……」という詞は私の耳に焼きつき、憧れとして沈澱し、とうとう大学受験の時には、史学科とスペイン語科を選んでいた。そして法政で先生にお会いできたことは、私の人生での大きな財産となった。

居眠りのおかげで先生と親しくお話しさせて頂くようになり、幼い憧れは学問として形を整え、具体的な卒論へと導いて下さったのは、先生の海外交渉にかける情熱であった。

『大日本史料』の元和二年のスペイン船来航の記事を裏づける史料を、地方史研究協議会の高知大会での史料展示会場・図書館で全く幸運にも発見できた事。それを報告した時の先生のものすごく喜んで下さったお顔。今でも目の前に浮んで、私の胸を熱くする。

その後はもう先生の御指導のまま。その史料が卒論になり、抜き刷りをメキシコ市に贈って下さり、来日したボクサー教授にお会いする機会を与えて下さりと、一介の学生には夢のような世界を展開して下さった。

家庭人としての先生も、理想の方であった。渋谷のお宅、追分の山荘へとしばしば訪問する度に、奥様との細やかで温い、それでいて互いの領分をしっかり保つ接し方に、随分新しい夫婦の姿を見せて頂いた。当時、同級生との結婚を目前にしていた私には参考になる御夫婦の姿勢であった。

「何十年一緒にいても、お味噌汁の味では対立するんだ」等とおっしゃる先生は、奥様から「この人は味オンチで……」とけなされて本当に嬉しそうに目を細められる。

先生が「学問だけの人生では駄目」と言われた言葉を勝手に自分向けに解釈し、怠け者の弟子は修論の『長崎奉行』を発展させるとお約束しながら、家事に子供に埋れ、現在になってしまった。

学問でも家庭でも、理想の先生の世界とは大きくかけ違ってしまっている。

油壺の『天咲』で御馳走になった折、小食になられた先生の残された分までたいらげた私達。夫がタクシーを捜している間、杖をついてニコニコと笑ってらした先生。寒いので私のマフラーを使って下さいと申し上げると、「いやいや御婦人の物を取り上げては……」と紳士振りを崩されなかった先生。

今はただ、先生の御冥福を心からお祈りさせて頂くと共に、奥様の御健康と御長寿を願い、先生の思い出を沢山聞かせて頂き度いと念じております。

（法政大学大学院修士課程修了）

岩生成一先生

鶴　木　亮　一

岩生先生に最初にお会いしたのは、私が大学一年の昭和四十一年でありました。お会いしたといっても、史学研究室におられた先生を偶々お見かけした程度で、とても気軽にお話しできる雰囲気ではなく、その自らそなわっておられる威厳に圧倒されたもの

Hosei University Repository

でした。

次に先生に出会うことができましたのは、専門課程に入り先生の講義を受講した際で、この講義は先生のお話しを絶え間なくただ筆記する作業で終始し、時折、先生の雑談が一息つける僅かな時間でした。

そして、学年が進み「当代記」「駿府記」を使った演習に出席するようになり、先生と直接お話しする機会が多くなるにつれ、喫茶店や旅行にご一緒させていただき、先生のあの何とも言えぬやさしい笑顔に出会えるようになりました。しかし、演習の準備不足を自覚している場合には、やはり恐い先生であることは否めません。怠け者の私も先生のこの厳しさに恐れをなし、卒論そして修論と提出させていただき、特に卒論では、第一回の岩生賞を授与される光栄にあずかりました。

その関係からか、大学院に残ると同時に、史学研究室でのお手伝いを命ぜられ、その後、故丸山忠綱先生とともに日本学士院にご紹介いただき、昭和四十五年から勤務し現在に至っております。先生が昭和四十年より学士院会員になられておられた関係で、先生がご逝去なさるまで親しくお会いでき、種々のご高説を承ることができましたことは得がたき経験と感謝しております。

その間、修士論文執筆の際は、職場の仕事にかこつけ遅れ遅れになっていた私をご自宅に呼ばれ、こんこんとお諭しくださいましたのには冷や汗の出る思いでした。その折には、お話しだけでなく、国立史料館の藤村潤一郎室長にご紹介くだされ、同館の所蔵史料で執筆するようご教示までいただきました。誠に申し訳けなく存じております。

学士院では月一回例会を開き、その折に第一部（人文・社会科学部門）関係の会員の間で論文報告が行われています。先生も左の論文報告及び紹介を九回なさいました。

(1)昭和四十一年六月
　独医ケンペルの日本史とその日本思想界に及ぼした影響
(2)昭和四十三年四月
　オランダ史料から見た徳川時代初期西洋医学の発達
(3)昭和四十五年九月
　片桐一男著「年番通詞と江戸番通詞の研究——その一例として吉雄幸左衛門について」
(4)昭和四十七年十月
　江戸時代の砂糖貿易
(5)昭和五十年四月
　蘭領東インド総督府総務長官 Carel Hartsinck（1611—1667）
(6)昭和五十二年二月
　十七世紀バタビア在住日本人の法的生活
(7)昭和五十四年十二月
　明治以前における洋馬の輸入と増殖
(8)昭和五十八年五月
　デ・カルトの孫弟子日本人数学者 Pieter Hartsinck
(9)昭和六十一年四月
　忘れられた歴史地理学者北沢正誠

Hosei University Repository

その折々の話題を豊富な資料にもとづき説明される先生の論文報告は、専門の異なる諸先生方にも常に興味をいだかせるもので、(5)(7)(8)の報告以外は総て『日本学士院紀要』に掲載されました。

また先生は、学士院において運営委員会、学術研究奨励金運用・補助委員会、国際学士院連合関係特別委員会など諸委員会委員を務めておられました。先生が会議室にあの独特のスマイルで入ってこられるお姿を思い出します。

さらに、先生が諸委員をなさっておられたため、所用で宇田川町のご自宅までお伺いしたことがしばしばございます。そのような時、学士院の仕事は早々に片付けられると、先生がそのとき手がけられているご自身のお仕事、例えば「続南洋日本町の研究」の出版の件、学士院でも報告された日系数学者ピーテル・ハルティンクに関すること、先生が卒論で抜われた中国貿易の研究を進展させたい等々のことを、熱心に話される若々しい口調に啓発されることしきりでした。

その先生が、本年三月二十一日に急逝なさるとは思いも及ばぬことでした。今でも、あのやさしい笑顔で「ヤァー」と声を掛けられ、会議室の扉を開けられるような気がいたします。だが今は幽明界を異にした先生とは再びお会いできないのです。寂しさは募ります。

（日本学士院勤務）

岩生先生を偲ぶ

酒井浩介

卒論「岡藩における切支丹について」についての面接試問の担当教授が岩生先生で、学問の力に対し厳しかったですけれど、学界でも屈指の先生から愛のむちを受けて感謝していました。

そうして、法政で勉強したことを認めていただいて、卒業しても上京した毎に何回かお会いしてお教えいただいたほどでした。

それで、今春も上京した時、その到着の翌日芥川龍男先生から「昨日お亡くなりになった」との報を伺い、上京している間、毎日悲しく、電車の中でも、天井を見上げ、涙が出て仕方がありませんでした。

今でも、先生のことを色々思い浮かべると目が熱くなり、涙が出そうになる日々であります。

（法政大学通信教育部史学科　昭和四四年卒）

Hosei University Repository

岩生成一先生遺影